



## ジョージア(グルジア)便り その68

Vol.86

# ジョージアのアーティストを結集させるぞ

文 高野 陽年

text by Yonon Takano

### ア

アジアとヨーロッパの間、かといつて中東でもなく、世界の狭間にあるような国ジョージアに来てから5年以上の月日がたった。この数年での街の変貌は凄まじく、最近では首都トビリシは新たなベルリンだ、なんていうことも囁かれている。たしかに在ジョージアのアーティストたちはとても活発である。そういつた芸術を発信できる場としての側面から新しいベルリンだと言われる所以なのだろう。

肉体的に厳しい練習を毎日反復して過ごす中で、いくら僕が新たに役を解釈しても、技術的に向上しても、舞台は一瞬の出来事である。

果たして僕はトビリシに爪痕を残すことができているのだろうか。そんな不安さえ抱き始めていたこの頃であったが、僕はトビリシという町が持つ、アクティブなアートへの情熱の中で新たな使命を見出した。

僕自身が持つ東洋的思想をジョージアのアーティストとともに、西洋芸術であるバレエというコンテクストで表現することだ。

白川静著の『漢字の世界』という本を題材に自らが振付、プロデュースして踊るバレエ作品はついに今春初演を迎える。バレエ自体の哲学、内容は次の機会に詳しく触れたいが、とにかくチームジョージアで日本の東洋的思想を探るのだ。

もちろん音楽、衣装、何もかもがオ

リジナルであり、アーティストも自分の手で探り口説いてきた。ジョージアのアーティストを僕の視点で編集すると言ったらいいだろうか。

自分のバレエダンサーとしての仕事の後に各アーティストと毎日打ち合わせを重ね、気が休まるときがない。しかしダンサー以外の芸術家と過ごす時間は刺激的で新たな活力を受け取ることができる。

作曲を手掛けるジョージアの若手最有力のピアニスト、サンドロ・ネビエリは弱冠18歳にもかかわらず30分にもわたる五重奏を書き上げてきた。彼にはまだ深い日本文化への造詣は無い。テレビや日本の音楽を聴く程度だそうだが、僕が話す内容を完璧に、しかも瞬時に理解しそれを音符へと変えてくれる天才である。彼が紡ぎだすピアノの音はまるでまさに書道家が全身全霊を込めてダイナミックに字を書くように、また同時に毛筆の柔らかさが兼ね備わっている。

衣装を手掛けている *Situati onist* は最近ではパリのコレクション、東京の百貨店でも取り扱うようなブランドである。もののははれの感覚を自然に持っていて、加えて彼の細部までのこだわりがダンサーの体より一層美しく見せている。

このほかにもまだまだ紹介したいバレエに関わっているジョージアのアーティストがいるが、別に機会にとっておこう。だがそうじて彼らに言えるの

はとても情熱的で、商業的目的よりも芸術的探究心からこのチームに加わってくれているということだ。

それはなによりもジョージアがアジアでもなければヨーロッパでもないと同時にアジアでもあればヨーロッパでもあるという矛盾しつとも不思議と成り立つ素地が彼らをこのバレエへと引き付けているのかもしれない。

僕はとことん周りに恵まれている。残りの初演までの時間を猪突猛進していくのみだ。

### Profile

2011年にロシアの名門ワグナバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。現在はその団の主要なダンサーとして国内外の公演で劇場を牽引している。立教大学中退。

